

新制高校へ移行期の飯田高校あれこれ

～高4回生の仁木豊之さんが語った話～

仁木豊之さんは、旧制中学から新制高校への移行期の学生で、昭和21年4月に飯田中学に入学し、昭和27年3月に飯田高校を卒業（高4回生）、通算6年間在学していた。

中学から高校への切り替え時に、1回だけ飯田風越高校、下伊那農業高校、飯田長姫高校からの編入が認められ、飯田風越高校、下伊那農業高校、飯田長姫高校から飯田高校に編入してきた学生もいた。

この頃の飯田中学、飯田高校は大変ユニークな学校であった。

戦時中、飯田に疎開して来ていた大学の先生方が多く、飯田中学・飯田高校で教鞭をとった大学の先生が何人もいた。大学の先生が飯田高校で教鞭を取ったので、飯田中学・飯田高校の学生の学力も大変高かった。飯田高校4回卒業生で東大へ入学した学生は12名おり、その前後の卒業回生の中では断トツである。

仁木豊之さんは飯田高校卒業後、東京商船大学に進んだが、東京商船大学のある教授から「飯田高校で、君を教えた。」と言われた。

当時は飯田高校から英語の教科書等（内容は高度であった。）が出版され、それが全国で使われた。これは飯田に疎開して来ていた大学の先生方が出版したのではないかと思われる。

当時の校長の人事権は飯田中学・飯田高校の自治会が握っており、自治会が認めなかったため、校長が何人も代わった。北原明治先生は何年か校長代理として勤め、その後自治会が認めたので、校長になった。

当時、飯田中学・飯田高校の夏休みの日数（3日程度であった。）、冬休みの日数（3日程度であった。）も自治会が決めていたし、土曜日・日曜日も授業を行うと自治会で決めていた。そのため先生方も大変であったが、よく従ってくれた。

飯田高校の先生の中には、革新的な先生が多かったので、共産党の徳田久一や野坂三造の講演会が何度も開かれた。

飯田高校の教科書も、新制高校の教科書は程度が低いという理由で、旧制高校の教科書が使われていた。そのためGHQからにらまれており、飯田高校の正門に、教材チェック用進駐軍駐在ボックスが設けられていた。

当時、GHQ駐在所が松尾にあったが、駐在している人達には品の良い人が

多かった。

その進駐軍が小遣い稼ぎに、飯田市内で進駐軍に支給される品物（ガム、チョコレート等）を販売していたが、飯田中学・高校生が、進駐軍の販売している周囲に集まり、英語の辞書をめくりながら、英会話の勉強をしたり、進駐軍に話しかけた。すると進駐軍は販売品の一部を学生に分け与えてくれた。

昭和22年4月20日午前11時48分頃、飯田の大火が発生。最初は飯田市知久町の八十二銀行南隣の民家から発生した火災が、強風にあおられ大火となった。城下町として発展してきた飯田市は、京都の町割りに倣って作られ、細い格子状の長屋作りの建物が整然と配列されていた。しかしその通路幅は狭く、また木造建物が密集しており、何度も火災の被害にあってきた。

火災が発生した当日、飯田中学野球部と松本深志中学野球部が飯田中学で交流試合を行っていた。途中、火災の発生に気づき、飯田中学野球部は「我々はこれから火災の救助活動に向かうので、試合を打ち切らせてもらおう。」と言って交流試合を打ち切り、救助活動に向かうことになった。松本深志中学の野球部員も救助活動に向かった。

この時、飯田中学・飯田高校では自治会で3ヶ月間、学校を休みとすることに決め、飯田中学・飯田高校生は、飯田市復興のボランティアに出た。

当時、飯田市内には、市内のヤクザや、浜松からきたヤクザが多く、夜になるとヤクザ同士の喧嘩が絶えなかった。その仲裁に、いつも恐れず乗り出し、理屈でヤクザを説き伏せ、喧嘩を止めさせる飯田中学校の加藤文彦氏もいた。当時、仁木豊之さんの自宅は飯田市銀座の精琴堂の隣にあったが、加藤文彦氏もその近くに住んでいた。

仁木豊之さんは飯田中学に入学したとき、校舎内で先輩の一人に「屋上に来るように」と言われ、ついていくと、「君を見たら殴りたくなかったが、殴っても良いか」と言われ、良いと応えた。すると思いっきり殴られ、吹っ飛ばされたが、「もう二度と殴らないからな」と言われ分かれた。そんなこともあった。

以上

(聞き手)

森田恒廣（飯田高校14回卒）